

# 人やものとかかわりながら学習する支援のあり方について

—養護学級高学年 図工科「なにをつくろうかな」の実践から—

関 和 典

## 1 はじめに

児童が制作活動を行う際に、まず考えるのは、そのものをどうやってつくろうかということではないだろうか。児童は描画や、立体的な創作物を作る際に実際に目の前にあるものをじっくりと観察し、その特徴を見ながらその部分を特徴として捉え、制作していくと考えられる。

次に、大まかに「もの」の実体が捉えられたときに、「もの」にとらわれず、イメージの中で制作をしていくということが考えられる。その際に児童は既習の事柄をフルに使って、自分の世界の中の「もの」を具現化していくものと考えられる。

ここで考えられるのは、児童のもつ「イメージ」を、指導者がどのように捉え、どのように支援していくということが、その学習を行っていく上で大切になってくるということである。

現在の小学生は、自分の生活の中に幅広い「もの」とのかかわりが多くあるとは必ずしも言えないのではないか。日常生活の中でパターン化された行動様式やみんなが同じような遊びを共有していく中で、児童の独創的な「イメージ」は年と共に固定化していつているのではないかと思われる。

知的なハンディーキャップをもっている児童にとって、こういったことに加えて、既習の事柄から抜けだし、「イメージの世界」の中で活動をするということはますます容易ではない。しかしながら、子どもの本来もっている独創性や、それを大切にするといった自分なりの思い入れやこだわりを大切に育てていくということは、指導者が創作活動を支援していく上で大変重要であると考えた。

本研究では、知的なハンディーキャップをもつ児童が、自分たちの日常生活の中で独創性や思い入れ、作ったものに対するこだわりをことができるよう、自分たちが生活や学習の中でイメージした「もの」を具現化するステップを考えていくことを主眼にしている。さらに、その具現化に至る過程で、他の児童や素材等のかかわりを通して、児童がいかに変容し、自分の作ったものに対しての愛着心をもつことができるかということに関しても考察していきたい。

## 2 本題材「なにをつくろうかな」の実践について

### (1) 題材についての基本的な考え方

児童が生活をしていく上で、身の回りにはたくさんものがある。そのもの1つ1つが固有の用途や意味をもっている。その中で、児童が必要感や目的意識をもって制作したものには、既製品にないこだわりや思い入れがたくさん込められていると考える。

本実践では、「これがある。」とか「こんなものをつくりたい。」という気持ちをもちながら制作していくことを願い設定した。

具体的には、児童がより必要感やイメージ化ができやすいと考えられる「劇あそび」の中で、自分たちが使用する小道具や衣装、背景の絵等を自分たちの手で考案・制作することによって、作ったものに対するこだわりや思い入れを大切にする心を育てたい。また、友だちと共に学習する必然性のある「劇」を取り上げることによって、他の児童とかかわり合いながら制作活動をしたり共同製作したりすることを促すことができると考える。

具体的な取り組みとしては生活や学習の中でイメージしたものをいかに具現化するか、ということについて、以下のようなステップを考えてみた。

ステップ（関連教科）	活動内容	支援
I 段階 ＜物語を知る＞ （国語科） ↓	○パネルシアターをみる。	1 物語の情景が思う浮かべられるような絵の提示をする。
II 段階 ＜絵にしてみる＞ ↓	○物語で印象的だったものを描く。	2 印象的なものをイメージできるような具体物の提示や言葉かけをする。
III 段階 ＜具体物を制作する＞	○絵を参考にしながら、具体物を制作する。	3 自分の描いた絵の内容を具体的に表現できるような具体物を準備したり、友だちの作っているものを見て参考にすることができるような言葉かけをする。

## (2) 研究仮説について

以上のステップをもとに以下のような研究仮説を立てた。

- ＜仮説1＞児童が具体的なイメージをもちやすくするために、段階的に支援を行っていけば、児童は自分の発想したものを具現化していくことができるであろう。
- ＜仮説2＞児童が自分のイメージをふくらませることができるよう、児童の発想により近い素材や具体物を提示したり、周りの友だちの様子に注意を向けるような言葉かけをすれば、児童はスムーズに制作をすることができるであろう。

## (3) 検証の方法について

上の表の1, 2, 3の支援が有効に行われていたかどうかを児童の様子から検証していく。

## (4) 児童の実態について

本題材における本学級の実態と課題は次のようである。

	児	実 態	課 題
か か わ り	⑬	友だちのことを意識して作品づくりに反映しながら活動することができる。	友だちの作品と関連づけながら表現活動を行うことができるようになる。
	⑭	友だちのことを意識して作品づくりをすることができる。	友だちの作品づくりを参考にして表現活動ができるようになる。
	⑮	友だちのことを意識して作品づくりに反映しながら活動することができる。	友だちの作品と関連づけながら表現活動ができるようになる。
制 作 活 動	⑬	自分がつくりたい物を大まかにイメージしてつくることことができる。	物語のイメージを考えながら自分なりに表現することができるようになる。
	⑭	自分がつくりたい物を大まかにイメージし表現しようとするところができる。	イメージ通りの物をつくらうとする気もちをもつことができるようになる。
	⑮	自分がつくりたい物を大まかにイメージしてつくることことができる。	物語のイメージを考えながら自分なりに表現することができるようになる。

## (5) 指導目標について

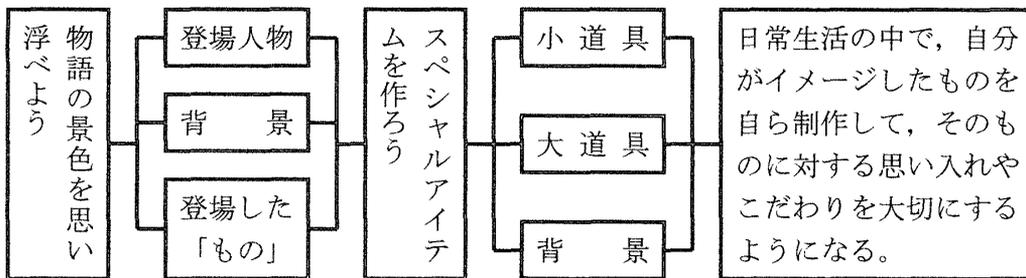
指導目標を以下のように設定した。

- 1 友だち同士で協力や分担をして制作することができるようにする。
- 2 小道具や背景等を自分たちのイメージで作り上げることができるようにする。

(6) 指導内容と計画について

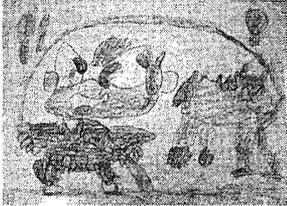
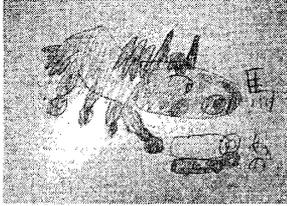
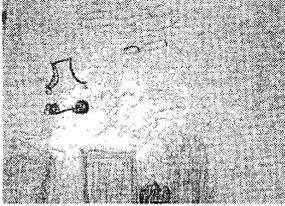
第一次（2時間）

第二次（6時間）



① 第一次での取り組みについて

第一次は<第Ⅱ段階>にあたる。<第Ⅰ段階>でパネルシアターにより十分に物語をイメージできていれば描画で豊かに表現できると考えた。

	主な活動と支援	児童の様子		
		児 ⑬	児 ⑭	児 ⑮
第1時	○物語を思い浮かべながら絵を描く。	○馬の絵を描いた。言葉かけによりパネルシアターにない木を描いた。 	○観音様の絵を描いた。自分の想像力を働かせて周りの情景を描くことができた。 	○娘を描いた。パネルシアターを参考にして、細かい所までよく見て描いた。 
	授業者の見方	○死んだ馬が生き返る所が印象的だったようだ。	○観音様の周りに川が流れていたりお供え物があったりした。	○パネルシアターの絵をまねている、といった感じだった。
第2時	○前時の絵を参考にして、さらに思い浮かんだものを描く。	○馬を描いたが、手綱やそれをひいている男も一緒に描くことができた。 	○お金持ちを描いた。ダンベルを描いている。 	○前時にはいなかった「占い師」を描いた。自分が考えついたキャラクターで意欲的に描くことができた。 
	授業者の見方	○前時の絵を参考にする事で自分のイメージが広がってきたようである。	○前時と違う登場人物を描いたが、本児が好きなキャラクターであったと思われる。	○例示の絵をあえて提示しないことによって自分のイメージで描くことができたと思われる。

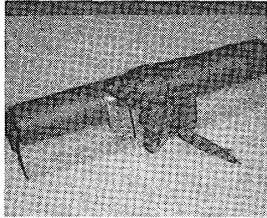
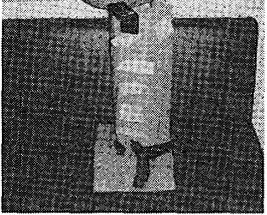
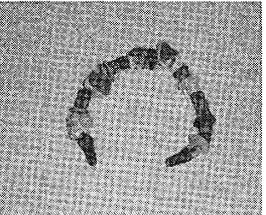
② 第二次での取り組みについて

第二次は、第Ⅲ段階にあたる。第Ⅱ段階での描画が児童のイメージをふくらませ、自分

が作りたいものの具体化ができている、として、本次では、児童が描いた絵や、その絵の中にあるものを具体的につくるとして必要であると考えられるものを児童に提示することで、より児童のイメージに近い小道具を作ることができると考えた。そのときの目標行動と指導者の支援、またそのときの児童の様子を以下に示す。

児	目 標 行 動	教 師 の 支 援
⑬	自分の描いた絵を参考にしながら自分のイメージする小道具を作ることができる。 他の友だちの作っている物と関連付けながら作ることができる。	物語の中の作品のイメージをもつことができるよう、自分の描いた絵を提示していく。 他の友だちの作品を制作の段階で見ることができるような場を設定する。
⑭	自分の描いた絵や、具体物を参考にしながら自分のイメージする小道具を作ることができる。 他の友だちが作っている物を意識して作ることができる。	制作のイメージをもつことができるよう、自分の絵や具体物を提示する。 友だちの制作している作品のイメージを言語化することばかけをする。
⑮	いくつかの素材の中から選択して、それを使いながら自分のイメージする小道具を作ることができる。 他の友だちのつくっている物と関連づけながら作ることができる。	作品をつくるためのイメージを持つことができるよう、素材を提示していく。 他の友だちの作品を制作の段階で見ることができるような場を設定する。

### ③ 児童の様子

学習の展開と ◎主要な働きかけ	児 童 の 様 子		
	児 ⑬	児 ⑭	児 ⑮
<p><b>1 はじめのあいさつをする。</b> <b>2 絵を見てなにをつくるか決める。</b> ◎児⑬には自分の描いた絵を提示する。(作りたいもの「馬」を決めていると予想される。) ◎児⑭には児童が作りたいもののイメージにあった具体物を提示する。(作りたいもの「剣」を決めていると予想される。) ◎児⑮には児童が作りたいもののイメージにあった具体物を提示する。(作りたいもの「反物」を決めていると予想される。)</p> <p><b>3 小道具を作る。</b> ◎児⑬⑮には他児の活動にも目を向けるよう言葉かけをする。 ◎児⑭には、作っているものに対する言葉かけをする。</p> <p><b>4 お互いに作ったものを発表する。</b> <b>5 おわりのあいさつをする。</b></p>	<p>◎予想していた馬を作るための段ボールを用意していたが、児⑭のために準備していた「剣」を見てそちらに気もちが行ってしまった。</p>  <p>&lt;授業者の見方&gt; ・まず最初の言葉かけの中で、児⑬を最初に聞くべきであった。さらに具体物を提示する順序が反対になったため、児⑬が「剣」に気もちが移ってしまったと考えられる。 ・作るスピードが速いので反物も少し作った。余分に用意していた良かった。</p>	<p>◎予想していたのはお金持ちがもっている「剣」であったが、実際に作ろうとしたものは「木」であった。指導者は全く予想していなかったため、馬を作るはずだった段ボールを提示していった。</p>  <p>&lt;授業者の見方&gt; ・授業者の全く予期しないものを言ってきたため、全く準備ができていなかった。児⑬が作ると予想していた「馬」の材料を使ったが、「木」の体裁には成らなかった。</p>	<p>◎最初は「反物」と言っていたが、自分が今まで作っていたプレスレットを完成させたいということを考えたようだ。本時はほとんどプレスレットづくりになった。</p>  <p>&lt;授業者の見方&gt; ・反物を作ると予想していたものの、前時に作ったプレスレットに興味を示して、そちらの仕上げをしたくなったと考えられる。実際に提示するものを精選しておく必要があった。</p>

### 3 考察

#### (1) 成果と課題について

本研究では、3つの段階を設定し、児童がよりイメージ化でき、そのイメージ化したものをできるだけ具現化するという事について、さらに、その支援について適切であったかどうかということについて考察をしていく。

○ 3つの段階はどうであったか。

これまで、劇の大道具、小道具、背景等はほとんどが教師が作ったものであった。それを児童自らつくるという取り組み自体、児童には新鮮ではなかったろうか。その中で、児童が自分たちがつくるものを、いきなりではなく、じっくりと児童の考えを引き出しながら行ったことは、児童が実際に作っていく上で、大まかではあるがイメージ化しやすいものに成っていたと考えられる。さらに、まず絵を描き、それをもとに次の活動に移るというやり方は、児童自らの発想を変えずに次の活動に移ることができるという面があったと考えられる。ただ、本研究を行う上で、児童が何を考え、どんなものをつくりたいと考えているのかということを見取る指導者の鋭い感性が最も必要であると痛感している。

本研究の成果と課題を以下の表にまとめた。

		成 果	課 題
第Ⅰ段階 ↓ 第Ⅱ段階	支援の1・支援の2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童の考えたキャラクターを劇の中に入れることによって、よりイメージ化が図れた。(児⑮より)</li> <li>○児童が物語の登場人物や、情景を大まかではあるが、感じ取ることができた。それは、第Ⅱ段階で指導者の言葉かけによって児童がすぐに絵を描き始めたことからいえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△児童が実際にイメージしているものをスムーズに引き出すための言葉かけや、パネルシアターを演じる際の話し手の力量が不足しているため、自分の好きなもの以外はすぐに引き出すことができなかった。</li> <li>△パネルシアターの絵を提示することで児童が自分のイメージの世界ではなく、パネルシアターの絵の模倣をするにとどまっていることもあった。</li> </ul>
第Ⅱ段階 ↓ 第Ⅲ段階	支援の2・支援の3	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童が実際にものをつくる際に、自分の描いた絵を参考にしたり手がかりにしたりすることが、自分の発想を変えないで行うことにつながったと考えられる。</li> <li>○具体物を予想して材料を準備したことによって、児童がスムーズに活動に入ることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○児童の作りたいものを指導者が予想していたが、それがことごとくはずれてしまった。そうすることで、児童が実際にものをつくる際の準備において、児童のこの実態に応じたものが用意できなかったことは大きな反省材料である。より確かな子どもの見取りが必要となる。</li> <li>○児童が作りたいものの体裁にならなかった(児⑭)ことは一番の改善点である。今後は準備を確実にしていきたい。</li> </ul>

#### 4 おわりに

知的なハンディーキャップをもつ児童にとって、自分が考え、自分でその考えのもとに何かを作り上げていくということは、全ての状況下で実現するといったことはないかもしれない。しかし、「自己実現」していくための1つの手段として、このような実践が多くなることが、本校養護学級の「生活力のある児童」を育成していく上で必要であるのではないかと感じている。